事情 明治太平記 十七編 下

村井靜馬編輯

特32
562

大日本教育會出納館
四 五 函
二 七 號
四 八 册
三 架

明治太平記十七編巻之二

東京　村井静馬著

説下二月十九日より京都の行在所より於て薩賊征伐の令を四方より下し二品有栖川熾仁親王を召勅して曰く頃日鹿兒島縣下兇頑の徒政府より問ふと熊本縣を擾乱せんとなりと聲言し擅ふ兵器を携帯して上陸を拒み官艦を奪ひんとせ反跡既

し顯然たり其罪討せざるべからず乃ち朕更に卿を以て征討總督に任ぜ委するに陸海軍務一切の區畫并に將官以下撰任黜陟等の事を以て

を因て近衛鎮臺兵を引率して朕に代りて黎元を保護し巨魁を殲滅して速に捷を闕下に奏せよ又陸軍中將山縣有朋に勅して曰く汝有朋總督參軍を命ぜ其を能く帷幕の機謀に參し凡そ陸軍に關するの事は篤く總督を輔翼し速に成功を奏せよ又海軍中將河村純義に勅して曰く汝純義總督參軍を命ぜ凡そ海軍に關するの事は汝篤く總督を輔翼し速に成功を奏せよ

その第一旅團は陸軍少將野津鎮雄司令長官となり岡本中佐はじめ參謀長たり第二旅團は少將三好重臣より野津大佐はじめ參謀長たり率ゐる所の第一旅團兵は東京鎮臺第一聯隊第三大隊大坂第八聯隊第二大隊東京鎮臺豫備砲

兵第一大隊第一中隊同輜重兵第一小隊傳令騎兵半隊より第二旅團兵々近衛歩兵第一聯隊東京鎮臺豫備砲兵第一大隊第二小隊東京鎮臺輜重兵第二小隊傳令騎兵半隊より第三旅團へ三浦少將の率うる所近衛歩兵一大隊大坂鎮臺歩兵二大隊と為し各自前後ふ神戸港を発し同日三間檜垣椎少警視海路より豊後鶴崎及び長崎港ふ赴く各巡査五百人を率ゐて横濱を出帆せ

廿日熊本ふて火本九ふ起りて樓櫓ふ延燒し僅ふ西面宇土櫓の一を餘して幸ふして彈藥を及ぼせと雖ども糧米為めふ灰燼ふ帰せしを以て軍吏城外ふ四散して紙購ふ此時城外の火益熾んふして人民の荷を負ひ東西ふ迷ふもの街衢ふ炬ふ填びて子を捨て親ふ放ちて泣叫ぶ雜沓言ふべからず此際ふ於て糧米の集るもの數百斛実ふ米穀ふ名なるの國ふ負ふ所と

熊本城ちゅうの失火の図

謂へべし軍吏ことを輸して城中に入る賊蓄始めて故のごとし熊本縣廳をまとめ先ずちまと一日薄書器械を收めて御船に避く縣令富岡敬明内務大書記官品川弥二郎と共に城に入て守る賊軍の先鋒川尻に至る谷少將ことと行在所に報じ且つ海路より其側面を突んことを乞ふ小倉分營の兵半大隊熊本に入る綿貫少警視も亦巡査四百餘人を率ゐて至る兵氣大に振ふ

此日陸軍少將兼司法大輔山田顯義東京を發して時に顯義司法大輔を兼て東京に在り一日省中に坐して軍機を熟思し僚属の申す所一も聽く所なし既にして書を司法卿大木喬任に遺して省を出て直に右大臣岩倉具視の邸に詣りて告て曰く今日西京に至ると大臣に止る肯んぜずして出づ大木司法卿又車を馳せて右大臣岩倉の邸に来る遂に及ぶ因て辞令

書を急使に付して之を追ふ使者新橋停車場に
て之を授く顕義依然として列車に上る
陸軍中佐國司順正も近衛兵一大隊を率ゐて
九州丸に乗りて横濱を発し賊の専使十四人長
崎縣下肥前茂木浦に上陸を警吏捕へて縣廳に
送る廿一日谷少將川尻の賊軍を襲ふて其動静
を試らんとし隈岡大尉として兵二中隊を率ゐ
別に大迫大尉として兵士三名と共に潛かに火
を人家に放ち之を乘じて進撃せんと午前第
一時城を出で火を川尻近傍の民家に放さん
とす適に賊の哨兵ありて知りて銃を発し我兵
其備へ知りて兵を収めんとする時に天
將に黎明に近し金を鳴らして城中に退く始め
西郷隆盛の小川に至るや遥かに熊本の火を望
み見て傍に在る者に問ふ答へて曰く熊本の將
士民家を自焼して我兵を防ぐんとするなりと

隆盛憮然として曰く彼は城に據て我兵を捍禦
ぶんとせるゆ吾が策あるに違へりと急に桐野利
秋篠原國幹等を召んで隊伍を整へて敵を誘せ
ぶんとせ爰に又熊本縣士族池邊吉十郎同志の
者七百餘人と共に賊軍に應ぜ吉十郎人となり
濶達能く和漢の学に通ず兼て砲術に長ず旧熊
本藩に於て少参事たりしが其後辞して鹿児島
に遊び帰るに及びて城中の熱鬧を避けて同國

玉石郡横島村に屏居して生徒を集めて和漢の
学を授く毎に改進の政圖を忌み嫌ひて自ら以
為らく廉恥の俗日に衰へ貪利の風月に盛んに
して全國一般上下とも深く洋臭に沈酔して國体
を知らず或は民権を主張して又甚だしきに
至りては共和政治を論ぜ況んや金貨濫りに出
輸して四民困弊して外夷の徒狂暴と我を加へ
るも素より以て自國の律未だ以て之を懲戒

池辺吉十郎同志と集めて賊を應ぐゝと議す

まるを能くすると西郷隆盛等兵を挙げて肥後に入るを聞きて喜んで曰く渠ふ〻兵を挙げべ政府を覆さんと手の平を反すがごとくに早かるべしと熊本に赴きたる同志松浦新吉郎山崎定平等に語り衆を集めてこれを議せ或々曰く西郷若し一旦志を遂げ権を専らにし威を弄して我輩を奴僕視せんと必ずこれを助くるか却りて彼を責らるの地を為さんと或ハ曰く刺客を名とし兵を挙ぐ豈天下の人を心服せしむるに足らんやと既にして衆議決せず吉十郎馳せて小川に至り別府晋助に就て志を告げ且つ熊本攻撃の方略如何を問ふ晋助笑つて曰く只経過せんのみ若し壁兵我を拒まば蹴破りて過んのみ何の方略か有んと事も無げに申しける吉十郎馳せ帰りて松浦新吉郎と共に隊伍を編制せ時に別府人を馳せて池邊

氏ハ嚮導者と乞ふ吉十郎池田何某と遣る既ニ
しておりくらく薩人の為る所權謀多しあの拳も
亦詐偽ハ出でざる能保ひべうゝばとこの夜再び
川尻ハ至り篠原の陣所ニ就て國幹と見んと欲
乞ふ已ニして國幹と見て攻城の方畧と陳ず篠
原ハ自ら部下を督して城を攻むる能見て始め
て熊本ニ帰り同志を糺合して賊陣ニ至る此日
賊の斥候兵千葉城の東面及び島崎洗馬河邊ハ
出没せ城兵ハ能見て銃を発して戰ひを挑む
と数四あり賊兵も亦應砲を発すること少時ハ
して退ぞく又胸壁を嶽の九ニ築きて益々守備
を嚴ハ廿二日賊將篠原國幹兵を督して熊本
城下西南の二搞と渡りて進む我ハ兵下馬搞を
守るもの邀へて砲擊を飯田九千葉城の兵之ニ
應ずて齊しく山砲を擊射を弾九東西ハ飛散り
砲聲山岳ニ響きて百千の雷の一時ハ落かるハ

如く賊兵進むと雖ども或いは我が小銃射程外に散布して銃を発せ須臾にして賊兵向方を東北に轉じて千葉城に向ふ守兵砲発して之を退ぞくせり京町及び錦山神社の傍に出没して狙撃せ埋門の守兵これを撃つ賊退きて寺原に屯せ我砲兵これを見て急に山砲を以て撃射せ弾丸賊中に落て死せる者甚だ多し賊終に散乱して去る時に午前第九時を過ぎたり賊兵の古城法華坂に向ふその散兵を布きて発炮せ法華坂の我兵之に應じて撃射せ縣廳の守兵巡査隊又進んで其側面を撃ちて之を走らす賊兵三百餘人復た花岡山を下りて高麗門に出て田間に散布して將に藤崎及び片山邸に迫らんとす其勢甚だ猛烈なり我兵能く防ぎて戦ふ賊轉じて段山に據り林に蔽へて狙撃せ漆畑の守兵之を防ぎて死傷頗る多く戦ひ最も力

是に於て滝川大尉安田中尉の兵援ふて片山邸に至り福原大尉巡査隊等まで踵で至る賊兵殊死して迫る砲聲山を動し煙焔天を蔽ふて咫尺をもとうず此時小島大尉部下と進めく賊の右翼と突き火と民家に放つく戦ふ漆畑の兵漸く段山の左翼に迫るに及んで賊の別隊へ島崎村に出てその背後と攻む我兵顧みて進む

得たり庄司大尉五島中尉安田中尉ともに死を此日城兵地雷火戍古城の前に埋め胸壁を築き増て且つ眺望を遮るものを除き去る賊斜西郷隆盛川尻口に舎しく本営を建つ務めて仁政を首唱しく其陣門に標しく新政大都督征討大元帥西郷吉之介と云ふ九州に於て別に政府と設けんとす因て専ら人心を得るを本とせんの時薩兵川尻に達し官艦其沖に至ることを豫うとめ

賊軍新政大都督征討大元帥の標と掲ぐ

新政大都督征討大元帥号言表

計り兵を沿海の地高橋に配布して後面の襲撃に備ふ高橋の人民家具を擔ひ家財を負ふて四方に奔竄し其騒動大うさなるを薩兵乃ち説諭して曰く我兵の来るい決して熊本城のごとくに焦土あらしめば若し我兵として来ること一日間を早くせしめば何ぞ城下をして斯の如くに灰燼たらしめんと衆心憑て安堵するを得たり是より後小倉分営の兵屢々戰へども衆寡敵せず退いて南の関を保つ南の関へ肥筑の境上にあり頗る要害に當ると以て官軍其保ち難きを危ぶむ始め賊軍の熊本城を攻るや念らく一呼して陷るんのみと然して城兵の防守能く其機に應ず賊兵の死傷する者頗る多し是に於て賊將池上四郎西郷隆盛に告て曰く此城一朝にして陷るべうもあらず之を攻めること日を曠うせば政府の軍備已に整理し援軍大に至らば上國に

出るの路塞ぐらん若ぞ数千の兵を残しく城兵の尾撃と扼ー全軍拳つく南の関み出づべーと西郷いまぞ答へぞ桐野利秋進んで曰く徴集の農兵能く何とゝ為さん詰旦将よ鏖殺よせんのを幸み慮りと過をと勿をと篠原國幹も亦此言を然りとを池上の曰く子等老成を以く我言を用ひぞ只後よ悔るとを無らんやと出て我ゞ陣所よ帰る攻るとを二日城遂よ拔けぞ是よ至りく始て軍を分く植木よ出づ此日大坂東本願寺を以て征討總督の本営とを廿三日熊本城兵の藤崎を守るもの賊の花岡山四方及び高麗門よ屯るを見て俄ゝみ撃つ法華坂を守るの兵之よ應ゞて戦ひ頗る烈ー土肥少尉賊の為よ狙撃せらるを弾丸よ當りく之をよ死を既よして警視隊も亦賊の片山邸よ迫るを邀へくまとを撃つ賊遂よ支ふる能ちぞ退きて段山よ據る縣廳の

守兵もまた塩屋町明八橋の賊と戰ひくこと久し
退ぞく小倉福岡の分営兵賊と木の葉に戰ふて
利なくして吉松少佐遂に死を官軍退きて
南の関を保ちたるを以て後軍の至るを待て戰へん
南の関へ左[illegible]久留米に通ず右へ三池に通
ず尤も要害の地たり山と隔てて北の関なり往
古の関城の古趾猶存す官船浪花丸肥後の八
代の沖に於て賊の運輸船迎陽丸を奪ふ巡査数

名浪花丸に打乗りて茂木網場等の近海を巡邏
するに遥かに迎陽丸の停泊するを見て大に之
を怪しみ小舟を走らせて之に近づき船長を本
船に召びて事由を訊問せんとす船に在る者辞
して曰く唯今船長を上陸して此所に居らずと
是に於て巡査を迎陽丸に乗り移り運輸士官一
人水夫長以下三十一人を縛して事の赴きを速か
に龍驤艦に報ず迎陽丸をして長崎港に引き来

巡査迎陽
丸と奪ひ
水夫長と
縛る

うて我使用に供し先に縛せし者い尽く同港の警察署に拘留を是うして賊兵を海運の途と絶せり廿四日朝野津少将を福岡に着し南の関危殆ありと聞く歩卒い人力車と雇ひくに由に乗せ将校を馬に鞭うち馳せくに至る至るべ即ち哨兵を配布し警備を厳之に因て官兵力と得て大に振ふ賊の進んで肥筑と畧せんとする者まく二軍に分ちく一軍い山鹿と陷る一軍い高瀬より南の関と衝んとす此日大山陸軍少将い鎮臺歩兵一大隊と率ゐて大坂に出張を同日逆徒征討の趣旨を京都行在所より各府縣に諭達せらる本日朝廷柳原前光に勅して鹿児島に遣い島津氏父子に懇諭せしむ参議黒田清隆これと護衛して随行を且つ陸海軍製造所處分をも以て山田陸軍少将伊東海軍少将仁禮大佐陸軍三大隊巡査五百人と率ゐて龍驤清輝の二

艦に乗りて俱に発艦せり　此日夜半賊兵熊本城
嶽の丸を撃射せ守兵出でゝ應ぜ賊竹林の中に
潛伏して発砲漸く衰ふ拂曉賊復た洗馬山崎より
城に迫る縣廳の守兵擊て之を退く時に日西
山に没して四面暗黑とゝなる賊又之に乘じて片
山邸に向ひて砲を発せ守兵其火を見て出で
應ぜ黎明賊の砲発大に減ぜり已にして天全く
明く城兵砲台を島邸に築きて霰弾を賊中に放

つ時に賊兵を熊本城の拔ぎて紙患ひ各隊長を
本営に會して之を議せ肥後の神風黨はしきに當
時賊に與せるもの西郷に謂つて曰く我輩夜に
乘じて拔刀肉薄誓つて城中に入らんと乞ふ総
軍以て之に繼げと此夜適々池邊吉十郎も本営
に抵りて西郷と見る西郷告るに此一事を以て
を池邊笑つて曰く神風黨は去冬鎮台を襲ふて
其志を得ぜ勇敢の徒も皆之に死して餘を所も

惟畀怯云ふ足らざる者のみ此言恐らくは虚
喝ふ出るなるん斯の如き輩と特に此拳と為
さんとへ寧ろ薩軍と以て夜み乗ト虚と伺つ
て城中へ突き入らを或い勝つを成萬一を得べ
し然りと雖ども大兵と動ゥしく暗夜を兵と交
うるハ白日の利なるふ如ぎと憚ゥる気色もな
く陳ドるれば西郷沈思良久うして曰く子が言
是なり仮令我兵と以て夜襲せるも地理を詳ら
らされば却つて敗を取るの患へなるんと因て
地理と池邊を質す池邊詳らふ之を答ふ西郷曰
く地理の險悪斯の如く其甚ぎしきゥと終み
此議と止む又此日征討總督二品親王有栖川熾
仁京都を発し高雄丸を乗りて兵庫港と発ち川
村参軍と之を隨ふ總督宮の京都と発せらるゝや
午前十時川村参軍と共み参内し聖上を小御所
を謁し奉りて馬車儀仗兵と賜ふて十二時日の

御門を出て七條停車場に至る此事や紙數限り
なきを又編を次ぎて委〻説下まゞ〻看者次
編の出るを待ち給ふべし

明治太平記十七編卷之二終

版權免許明治十一年四月九日

第六大區八小區
本所外手町十八番地
著者 村井靜馬

第壹大區六小區
日本橋通二丁目四番地
東京 書肆 小林鉄次郎藏板